
遊戯王 trust of world

スマイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 trust of world

【Nコード】

N3005Y

【作者名】

スマイル

【あらすじ】

**5D・sの世界からGXの世界へのタイムトラベルものです。

**

主人公『不動カイト』が織り成す学園生活。デュエルアカデミアにて起きる闇との戦いを仲間達と共に立ち向かっていく。

タクティクス、知識共に中の下。当時の資料を読み漁りながら進めていきます。

単純に、シンクロ召喚を展開したいのが本音だったり。

第0話 第一次報告& a m p・前振り

第0話 定時報告

ス「いやゝ、ついに手を付けましたよ、遊戯王に。かなり前からデュエルやってますが、仲間内、兄弟内では全く勝ってませんけどね」

??「そんながよくこの小説描こうと思ったよな…正直不思議だぜ」

ス「おやおや、アナタはどちらサン？」

??「この小説の主人公、って言ったら笑う？」

ス「いえいえ、弱小たるワタクシの分身でございましょう？」

??「何を隠そう、って違うわヴォケエ!!」↑思いつきりアップ

ス「あばすっ!!?」

??「ホントに主人公だつつつてんだよ。この能無し!!」

ス「ぜ、全力、全開、ツスカ…（がくっ）」

??「ま、いつか。さてさて、いよいよ始まります、『遊戯王 trust of world』。初回はこんなですけど、次回から本編に入ります。できれば長い目で見ていただけたら幸いです。

どうぞ、よろしく願います！！」

第1話 仲間との絆、運命の初戦（前書き）

とりあえず、第1話です。

キーカードは…『レッド・デーモンズ・ドラゴン』

カ「レベル8のシンクロモンスター…守備表示モンスターの効果破壊と、攻撃宣言しなかった自分のモンスターをエンドフェイズ時に全て破壊する効果を持った強力カード」

ス「ジャック・アトラスのエースモンスターだ。シンクロ素材に縛りがない分、容易に召喚できるし、レベル8モンスターの中でも妥協召喚で出す人はまずいないだろ」

第1話 仲間との絆、運命の初戦

とある昼下がり、

学生服を着た少年と、フリルがついた青いコートのおかつぱ頭が会場内で決闘デュエルをしている。

ここはデュエルアカデミア試験会場。既に俺の前 - つまり、会場にいる少年までは試験が終わっている。ちなみにあの青コートは少年を「ドロップアウトボーイ」と呼び、蔑んでいる。ま、受験番号110番じゃそう言われるしかないか。会場では無骨な歯車だらけの機械人形が、翼の生えた超人を見下している。機械人形は『古代の機械巨人アンティゴレキス』。翼の生えた超人は『E・HERO フレイム・ウィングマン』だ。どちらの攻撃力が上かは言わずもがな。その時、会場内が摩天楼に変わる。

（摩天楼・スカイスクレイパー……か。終わったな）

『フレイム・ウィングマン』の効果も併せれば、もう終わったも同然だ。観客席から1Fの廊下に向かうと同時に歓声と試合終了のブザーが聞こえる。どっちが勝ったかは見ない。見たところである少年と戦う訳じゃない。

（さて、どのデッキで行くかな、と）

ベルトに通っているホルダには三つのデッキがそれぞれ入っている。どれも皆引退したプロのデュエリストから託されたデッキだ。とりあえず左側のデッキで試してみるか。

デュエル・ディスク
デッキと共に決闘盤を取り出す。皆が使っている一般生産タイプとは全く違い、モンスターカードゾーンは分割せず一列に並んでおり、ディスクが丁度手の甲の辺りに装着するタイプ。こいつの名は「ホイール・オブ・フォーチュン」。デッキと共にこれを渡してくれた人からは「必ず勝ち続ける!!」と脅迫(?)してきたけど、デュエルには勝ちもあれば負けもある。今は命がかかっているわけではないので、試用ってことでこの人を使うことにした。
ある程度調整が終わったところで、先程の少年がこちらに走ってくる。

「アンタか、俺の次にデュエルすんのは」

「ああ」

息を切らしているのは急いでいるからじゃない。早く見たくて急かすために来たようだ。

「さっきの人が待ってるぜ。早く言っただろうがいいんじゃないの？」

俺の対戦相手はあの人か……あんまり気が進まないな、あの人相といい……

「解ったよ、そう急かすな」

「頑張れよ?あの人結構強いぜ」

「それも知ってる。あと、お前。名前は？」

「俺は十代、遊城十代だ。アンタは？」

「カイト…『不動 カイト』」

そう名乗ると、十代の横をすり抜けるように立ち去る。とっとと行きましょ。待たせたとあっちゃ、決闘者^{デュエリスト}としては失格だ。

「来たようなノ〜ネ。ワタシが試験担当官のクロノス・デ・メデイチなノ〜ネ」

「受験番号9番、不動カイトです。よろしくお願いします」

ちゃんとしたお辞儀の後に目にしたのは、目を丸くしているクロノス試験官。

「何か？」

「い、いえ、礼儀正しくてよろしいノ〜ネ。ちなみに遅刻した理由は何ノ〜ネ？」

「ちよつとばかり渋滞に巻き込まれて…」

「そんなノ〜ネ。それより早くデュエルを始めるノ〜ネ」

試験官がディスクを起動させるのに合わせて、俺もディスクを起動させる。何だか似てるな、あの人のディスク……

「「^{デュエル}決闘！！」」

クロノス LP 4000

カイト LP 4000

「先攻は私なノ〜ネ、ドローニヨ……私は『^{アンティイターサイネア}古代の機械騎士

を召喚するーノ。そしてカードを二枚伏せてターンエンド」

クロノス 古代の機械騎士 ATK＝1800 DEF＝500
伏せカード 二枚

ふうん……セオリー通りか。あの二枚のどちらかは『奈落の落とし穴』、もしくは保険として『聖なるバリア・ミラーフォース』かな。じゃあ、こっちはこっちのセオリーで、

「俺のターン、ドロー。手札より^{マジック}魔法カード『ハリケーン』を^{マジック}発動。^{マジック}魔法・罠カードゾーンに置かれているカードを全て手札に戻す」

「なっ、何でスト〜ッ！〜！」

竜巻によって伏せられていたカードが全てクロノス試験官の手札

に加わる。

「更に、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない時、手札よりレベル5の『バイス・ドラゴン』を特殊召喚できる。来い！！『バイス・ドラゴン』！！」

紫色の無骨なドラゴンが咆哮と共に光の中から現れる。緑の翼を羽ばたかせ地に降り立つと、機械仕掛けの騎士に威嚇する。

バイス・ドラゴン ATK＝2000 DEF＝2400
ATK＝1000 DEF＝1200 ↓

「レ、レベル5のモンスターを特殊召喚……って、ステータスが下がってますノ？」

「これがこいつのデメリットだ。この方法で特殊召喚されたこのモンスターの攻撃力・守備力は半分になる。まあ、俺は手札から『ダーク・リゾネーター』を通常召喚！」

音叉を持った小柄な悪魔。それだけしか説明できない。ただ、シユールだ。

ダーク・リゾネーター ATK＝1300 DEF＝300

「レベル5の『バイス・ドラゴン』に、レベル3の『ダーク・リゾネーター』を……チューニング……！」

「チュ、チューニングでス……ト……！……？一体何を……」

狼狽するクロノス試験官を差し置いて、デュエルは続く。アンタの

言葉……今使わせてもらっぜ。

「『王者の鼓動、今此処に列を成す。天地鳴動の力を見るがいい。』
『シンクロ召喚！』」

『ダーク・リゾネーター』音叉を弾いた瞬間、三つの機械的な輪になり、『バイス・ドラゴン』を包む。その中から五つの光が列を成し、一筋の光となったとき……赤銅と赤を纏った異形の竜が俺の後ろに降り立つ。焰を纏って…

「我が魂…『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

「こ、攻撃力…3000でスート！！？」フルーアイズホワイトドラゴン『青眼の白竜と同じステータスなノ〜ネ！！』」

ま、確かにこつち（・・・）じゃ驚くことだろうけど、攻撃力3000なんてばら撒かれてるようなモンだし、気にしない気にしない。

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』 ATK＝3000 DEF
＝2000

「す、すっげ〜…」

「何か、怖い…」

「カッコイイ〜、あんな召喚初めて見た！！」

十人十色とは言っけど、ホント、凄い反応。けど、客寄せパンダ

じゃねえんだ。一気に行くぜ。

「バトル!!」『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『古代の機械アンティーク・ギア騎士に攻撃!』『アブソリュート・パワーフォース』!!!」

『レッド・デーモンズ』の手の平から放たれた焰によって、機械仕掛けの騎士は溶解し、爆発それに巻き込まれるようにクロノス試験官のLPも減っていく。

「あ、アンビリバボー!!」

クロノス LP 4000 ↓ 2800

「な、何て攻撃なのネ……も、もう私の場がガラ空きのネ」

「俺はカードを三枚伏せ、ターンエンド」

「くくつ……私のターン、ドローニヨ」

あの人のあの台詞にあの間延びしたような喋り方……何とかなんねえかな? 妙にカチンとくる。とはいえ、俺の手札はゼロ。手首についているカードホルダーには手札が一枚も無い。ま、次の手も読めなくは無いか……何が出るかな?

「私は手札から『古代の歯車アンティーク・ギア』を守備表示で召喚。そして手札から魔法カード『機械複製術』を発動する。表側表示で存在する攻撃力500以下の機械族モンスター一体を選択して発動。選択したモンスターと同名モンスターを2体までを自分のデッキから特殊召喚する。』」

古代の齒車アンティーク・ギア★3 ATK＝100 DEF＝800

齒車に車輪が付いた人形が守備表示で三体现れる。しょうがない……次のターンで一掃するか。なんて考えてると、クロノス試験官が何かほくそ笑んでいる。気持ち悪っ!!

「カードを二枚伏せ、ターンエンドです〜ノ」

（フフツ……これでシニョールカイトは二ターンの間はこれを破壊しなければダメージを与えられないでしょう。ですが、私にはまだ伏せカードがあるのです〜ノ）

「俺のターン、ドロー」

来たのは『ロスト・スター・ディセント』か。一応の保険としては充分だな……けど、あの伏せカードは恐らく攻撃反応型か。『ハリケーン』で手札には戻したけど……さっきの推察どおり十中八九『それら』だろう。

「カードを一枚伏せ、バトル。『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『古代の齒車』アンティーク・ギアを攻撃!!」

あつちは読みどおりとばかりに、何もしてこない。恐らく終盤あたりに意表について発動するだろう。だったら……

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の効果発動!!」

「な、何です〜ノ!!!?あひやあああっ!!!!」

攻撃は齒車に当たった瞬間、誘爆するようにして残りの二体も破

壊される。その爆発が収まる頃には、クロノス試験官のモンスターカードゾーンはガラ空き。

「い…一体、何が起きたんですノ!？」

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の効果……このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃したとき、ダメージ計算後、相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する」

「……………」

口をアングリと開けたまま驚いている試験官を尻目に、伏せカードを発動させる。

「更に伏せ（リバース）カードオープン。速攻魔法『サイクロン』発動。中央のカードを破壊する」

カード一枚分の小さな竜巻が伏せカードを弾き飛ばす。破壊したカードは…『聖なるバリア・ミラーフォース』。運が良いんだか悪いんだか…。

「俺はこのままターンエンド……アナタのターンですよ?」

「わ、私の…ターン、ドロー…ッ!？」

その表情で俺は知ってしまった。多分あの人の手札にはモンスターがない。その表情から推測すると、あの伏せカードは……特殊召喚型の罠じゃない。

「タ、ターンエンド、なノ〜ネ……」

もう逆転の一手も残っていないような、肩を落としたクロノス試験官にはちよつと申し訳ないけど、降参しない以上は決闘は続行。^{サレンダー}つまりは、俺がクロノス試験官のLPを0にしない限り終わらない。

「俺のターン、ドロ……そのままバトル！！なんですけど……クロノス試験官」

「な、何なの〜ネ？」

「ブルーアイズみたいな終わらせ方だったら納得します？」

「そ、それはどういう」答えは聞きませんがね「お、鬼なノ〜ネ！！！！」

「『レッド・デモンズ・ドラゴン』^{ダイレクト・アタック}で直接攻撃！！『灼熱のクリムゾン・フレア』！！！！」

手の平に集まるはずだった焰が、『レッド・デモンズ』の口に渦を作る。練り上げるように溜められた焰を一気に吐き出したところでデュエル終了のブザーが鳴る。

クロノス LP 2800 ↓ 0

「お、おい……嘘だろ……あいつのLP減ってねえし」

「つ、強い。あのクロノス先生を無傷で倒しやがった……」

「か、カッコイイ……」

ありがとうございました、と礼をして、そのまま会場を後にしようとした俺は観客席の見てしまった。闘争心剥き出しの男子達と、目をハートマークにして黄色い声援を送る女子達の二極だった。こ、怖い……これがホントの『天国と地獄』ってか……てか、この状況じゃ両方とも地獄だわ!!

廊下を戻る最中、十代とは会わなかった。慌てて来ておいて慌てて帰る。ちよつとした台風だな……ポケットからロケットを取り出すと、その中に詰め込まれている写真を見つめる。

「やっと第一歩だ。絶対に約束、護るからな……義父^{とう}さん……」

そこには優しい表情で写っている自分と義理の父……『不動遊星』だった。

第1話 仲間との絆、運命の初戦（後書き）

やっと一話投稿です。

デュエルの描写って難しいです。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第2話 出遭いと入学 明日への誓い（前書き）

さてさて、第2話でございます。

デュエルはありませんが、キーカードをば。

キーカードは…『スター・ライト・ロード』

ス「自分フィールド上のカードが破壊される効果が発動した時、その効果が無効にして破壊し、エクストラデッキから『スターダスト・ドラゴン』を特殊召喚する誘発即時効果の罠カード^{トラップ}」

カ「『スターダスト・ドラゴン』の特殊召喚は任意だけど、二枚以上破壊される効果のみが対象で、正規の召喚方法じゃないから『スターダスト・ドラゴン』の効果では蘇生できない。デメリットはそれぐらいか。終盤じゃ殴り倒されるし」

第2話 出遣いと入学 明日への誓い

アカデミア島へ向かうフェリーの中。

見事合格した俺は、ボストンバッグを枕にして寝転んでいる。あの後がまあ大変だ。怒涛と言っても良い。

試験後、お世話になっている海馬コーポレーションで一週間程、デッキのテスターとして寝泊りしていた。休憩は朝と夜だけ。食事休憩は昼食のみという何ともスパルタな一週間だった。

『こちら側』に來たときに社長と会って経緯を話したところ、オカルト話と一蹴され追い返されそうになったとき、丁度カードケースの中にあつた『伝説の白石』を見せたところ、異常なまでに喰い付いてきて、テスターとして雇ってくれることになったのだ。それから前述の通り、怒涛としかいえないほどの仕事を押し付けられた。何でも以前まで雇っていたテスターがそのあまりの仕事の量に根を上げ、逃げ出してしまったという。何とも教科書どおりの進み具合だ。こういうの何て言うんだっけ……ああ、『テンプレ』か。ソレは兎も角。持ってきたディスクも調整してくれたりと至れり尽くせりだが、フェリーに乗る数時間前まで報告書の山と格闘した。しかも徹夜で。義父^{とう}さんと一緒にD・ホイールを組み上げたときも徹夜だったけど、二晩連続は流石に身体に堪える。

てことで、今は朝寝中。っていつてもまだ起きてるし、陸を離れてまだ数分。しかもこの人の量では寝るに寝れない。足を組んで頭の後ろで手を枕代わりにしているが、それでもこの揺れようはちょっと寝れるモンじゃない……人でこった返している中、ある一人の男が俺の頭の上にやってきた。黄色い上着と白いズボン、ガタイが

良さそうな顔付きだけど、ちょっと理知的にも見える。たしかコイツは受験番号1番…筆記試験が首席だったな。

「やあ、ちよつと良いか？」

「嫌だ。俺はこれから寝るんだ……とはいえ、これじゃあ寝れない、か」

体を起こすと、やっぱり五月蠅い…そんなにデュエルしたいなら外に出ろよ。風強いし、お前等全員飛ばされて来い。寝れないストレスに苛まれている俺に、男は同情するように肩に手をやる。

「原因は俺じゃないが、悪いな。多分、浮き足立ってるんだろ？」

「それ、使い方おかしいぞ。『浮き足立つ』っていうのは不安で落ち着かない様子のことだ。日本語を勉強する為に俺に話しかけたのか？」

「とんでもない。試験の時にお前が見せた『あの』召喚方法について聞いたかったのさ」

ほら来た。そういうのはもうちょっと後にして…くれないか。俺の周りでベラベラ喋り倒してるコイツ等に比べれば、こっちが尚の事落ち着く。

場所を変えようと立ち上がると、その男『三沢大地』もついてくる。ほとんど人気のいない、というか何人か女子がいるけど気にしない。手摺に寄りかかると溜息混じりに話を切り出す。

「さて、『シンクロ召喚』について知りたいんだっただか？」

「『シンクロ召喚』…そういう名前なのか？どついう理屈だ？」

「単純だよ。それぞれ素材となるモンスターの『レベル』を合計したレベルのモンスターを特殊召喚するのさ。俺が試験の時に出したモンスターの『レベル』は8。素材になったモンスターはそれぞれレベルが3と5、それで召喚できる。ただし、素材となるモンスターの中に必ず『チューナー』と付くモンスター1体が必要だ。更にこの召喚方法は特殊召喚扱いだから、その気になれば場に5体並べられる」

「つまりはレベルの足し算、か。原理は単純だな」

「まあな、いくつか例外はあるが…俺はあまり使いたくない。タクティクススピードと場の読みが必要不可欠になる」

「それは見せてはくれないのか？」

「客寄せパンダじゃねえんだ、そんなに大盤振舞いする気は更々無い。これに関して付け加えるのなら、『シンクロ召喚』するモンスター…『シンクロモンスター』は融合デッキに入れられる。これでいいか？」

「ああ…参考にさせてもらつよ」

何の参考にするんだか…考えられるのは『メタデッキ』か。けど、『あれ』は…ちょっと。でも特殊召喚を止める、もしくはデメリットに変える構成にすれば、あるいは…。うーん、敵に塩を送りすぎたか…俺は馬鹿だ。

「ねえ…もしかして、あの人じゃない？」

「そうだよ。きっと」

「結構奇抜な格好だけど、良い人そう…顔も悪くないし」

「あたしはまあまあだと思うけど…」

その後、三沢と他愛ない話をしていると耳に入ってくるのは……ヒソヒソ話や陰口だ。大声で言いたい、ハッキリ言って『耳障り』だ。こつちの話がまともに出来ない。ていうか俺の格好、おかしいか？おかしいよな。

黒のYシャツに赤のズボン。更に赤いチョッキなら誰だって目を引く。まあ、黒いコートのお陰で目立たないだろうけど……。

「そついえば三沢、遊城十代って知ってるか？」

「ああ…クロノス先生を倒した奴だろ？ある程度ついていうか、君とは負けず劣らず噂になってるよ。融合デツキを使いこなすデュエリストだってさ」

そんなんで比べられると、正直怒りのやり場に困る。コイツ、解つてて言ってるようだ。見掛けによらず頭の回転は早い。

「融合……『E・HERO』だったか？たしかに召喚速度や手札回りは充分に速いけど……シナジー出来るカードが多すぎて使い辛いな。一度だけ使ったことがあるけど、事故率が高過ぎる」

「ピーキー、と言った方が無難だな。正直、俺でも使いこなせそうに無い」

まさかこんな所で同じ意見と出会うとは……。

あのデッキの弱点は『偏り』や『縛り』ではなく、自分とデッキの『対応速度』の違いにある。欲しいときに来ない。必要な場面じゃないのに手札に来る、といった『擦れ違い』のような事が頻繁に起こる。まさかデュエル開始時の一番上のカードが『ホープ・オブ・フィフス』だった時は正直ゲンナリした。墓地には何も無いですよく、てな顔になったし。

「ま、アイツらしいデッキなんだろうけどな……俺とは大違いだ」

「君は『シンクロ召喚』主体のデッキだろ？」

「そうなんだけどな……俺は自分で『組んだ』んじゃないで、『借り』てるんだ。ほとんど」

「え？そうなのか？」

俺が持つてるデッキは全部で五つ。その内の一つはかけがえのない大切なデッキだ。これを主に使って行くとは思うけど……『こつち』じゃステータスが必要、低レベルは要らない、なんていう事だから俺の精神がもつかどうか……

「でも、借りてるからと言って疎かには出来ない。コイツ等は……特にこのデッキは、俺にとって大切な人から託されたデッキなんだ」
手の中にあるデッキの一番上には『スターダスト・ドラゴン』。こ

れは俺の義理の父親『不動遊星』から託された絆と想いが込められている。そんなの、無下に扱うわけにはいかないだろ…。

「余程大切なんだな……そのデツキが。お、見えてきたぞ」

三沢の視線の先には島が見える。山の頂上辺りには三つの塔に黄色いドームが見える。あれが『デュエル・アカデミア』か……長い三年間になりそうだ。

その後、長くて有難い校長先生のお言葉を拝聴してから各寮に分かれて移動する。事前に渡された制服の色は青。つまり『オペリス・ブルー』だ。あのエリート気取り、嫌いだし……あまり関わらない方が良くも。それに俺、青嫌いだし。わざと降格しようかな……『オシリス・レッド』の方が居心地良さそうだ。あの古びた感じが何とも……なんて考えてる間に寮の部屋に入るけど……ここ、ホテルか何かか？えらい広いし、ベッドもデカイ。終いには寮の食事。朝昼晩とフルコースだというから何だか腹が立つ。ていうか既に立腹状態です。適当にバッグを放ると、着替えもせずソファに寝転ぶ。フェリーで寝れなかった分、こっちで安眠させてもらおうとす……る……（怒）。

何かゴチャゴチャウルセえな。何だよ、ったく。考えてみれば、ここ二階だし…デュエルフィールドが丸見え。しかも言い争ってる中に、あの遊城十代までいる。一緒にいるのは確か……在籍中の帝王^{ザイ}の弟、だったか。相手は勿論『オベリスク・ブルー』の生徒。あ、ゴメン。もう限界。窓を全開にすると、ベランダに出て身を乗り出す。

「貴様、まんじょ「ウルセー」！！！！静かにしろ！！寝れねえだろうが！！」……ッ！！」

まるでテレビを点けたら大音量だったみたいな表情で全員がこちらを見ている。その輪の外には金髪の女子までいるし、彼女は耳を塞いでいる。フリーの乗員にまで聞こえたんじゃないか？今の。

「テメエら、揃いも揃って仲良く出来ねえようだな……次に俺の安眠妨害してみろ？完膚なきまでに叩き潰してやる」

まるでジャックが乗り移ったかのように俺の周りが赤く染まる。お、コレが『荒ぶる魂』って奴か。今なら使いこなせそうだ。ベランダから飛び降りて赤と青を交互に見る。別に複数でも良いんだけどな…。

「貴様、『オシリス・レッド』の奴等の肩を持つのか？そんな小さい奴がこの『オベリスク・ブルー』にいるのは、この品格を下げるのと同じだ。今度からは「何フカシこいてんだ？俺はテメエ等だけに言ったんじえねえんだよ。幼稚園からやり直して来いよ。青^サ二才」

「え……俺も？」

「当たり前ツスよ、アニキ。これは元と言えば僕達が勝手に…」

「そのメガネ、理解したか？次は無えぞ……誰だろうと『手加減しない』」

それはつまり、１ターンキルされても文句言っただけで事だ。まあ、実際やったことないし、やる気もない。でも脅しには充分でしょ？

「万条目さん、コイツですよ。ノーダメージでクロノス先生を倒したの」

「そうだ、コイツだ。見たこと無い召喚方法を使ってた…」

あのツンツン頭……アイツがこの愚図共のアタマか……威厳だけは一人前だけど……

「ほう…確か『不動 カイト』だったか？」

「テメエのようなサルに、名乗った覚えは無いけどな」

「サ……こ、この俺を侮辱するとは、貴様…っ！！」

「どのお前だか俺には見当が付かない……喧嘩はゴメンだが、デユエルなら何時でも受けてやる…『王者^{キング}』の弟子である俺が…」

「キ…キングだと？一体だ「お前は知らなくて良い。二度と俺のやることに口出し、手出しはするな」…っ！」

二度目の台詞被せが終わったところで俺は部屋に戻る。全員言葉を

失っているようだが、やりたいことを邪魔されれば誰だって怒る。でも、今の俺はかなりマズい事をした。あの場にいる全員に『宣戦布告』をしてしまったのだ。いつも一言足りないんだよなあ。

部屋に入り、ドアを閉めるとほぼ同時にノックが聞こえる。また安眠の邪魔をするか……今度は丁重にしないと。いつまでもコレじや埒が明かない。

「はいはい…次はどちらさ…ま、ってアンタ…」

「こ、こんにちは…」

ドアを開けた先にはさっきの輪の外にいた女子。名前はまだ知らないが、何だか申し訳なさそうにしている。おれ、何かしたかな…？あ、ヤバイ。

「その…さっきの事だけ…」

「いや、アンタは、その……何っーか、巻き込まれた？って感じだから、気にしなくて良いぞ」

「そ、そう…良かった…」

「俺はああいうのはハナから大嫌いだけど、初対面なら誰だって仲良くしたいだろ？」

「ええ……そうね」

な…何だ、この会話。まるでカップルが喧嘩した後の空気だろが…
な、何とかせねば……。

「あ、あの……」ど、どうぞ？」

駄目だ…完璧におかしい……どうしてもこの空気から脱出できない。

「出来ればなんだが…ハイ」

差し出した手に疑問を感じているが、取り敢えず友好の印ってことで。

「俺はカイト、『不動 カイト』だ。よろしく」

「明日香よ、『天上院 明日香』。よろしくね、不動君」

握手。

それだけで本当に友達になれそうだ。かといって小さい輪にまとまったまま過ごしたくないな…後で十代達にも謝っておくか。衝動的とはいえ宣戦布告しちゃったし。

「取り敢えずこれぐらいにして、俺…寝るわ」

「ま、待って」

「?…どうした？天上院」

「明日香で良いわ。その、万条目君の事だけど…あまり関わらない方が良く、って言いたくて…」

何かしらしい……さっきまでは凜々しく見えたのに……

「ま、相手になるなら容赦しないし……適当に放っておくさ。ただ……」

「ただ？」

「俺にとつて『許せない』事をしたら、その時は……本当に『叩き潰す』けどな」

誰に向けたわけでもない威圧は、明日香にとっては恐怖の対象だろう。目の前でそんななんされても困るし、怖い。

「てことで、今度こそ寝るわ。二晩徹夜はキツイし……」

「え、ええ。ごめんなさい……勝手に」

「良いんだよ。もう友達、だろ？早いけど、おやすみ」

「……おやすみなさい……」

そう言つてドアを閉めると、ソファに寝転ぶ。何かどつと疲れた。色々ありすぎだろ……此処に来てから。今度からはあのイメージを常に出せるようにしなきゃな。『アレ』を使いこなす訓練には丁度良い。

そこで一瞬にして思考が切れた。それこそ本当に糸が切れた人形のように……。

数時間後。

部屋の前にシルバーのワゴンが止まってる。見てみると、味付けしてただ焼いただけの肉や野菜が並んでいる。それにラップしてある皿の脇にはメモが。何々……

睡眠ばかりじゃなくて、食べなきゃ駄目よ？

天上院

あんたは、俺の母親かつつの。

第2話 出遭いと入学 明日への誓い（後書き）

長々と申し訳ありません。

デュエルに関しては構想中ですので、しばしお待ちを。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第3話 デュエルでも 必要なもの（前書き）

第3話でございます。

本日のキーカードは……『紅蓮魔竜の壺』

ス「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がフィールドにいる時に発動できて、デッキからカードを二枚ドロー出来る」

カ「サポートカードの意味合いが強いし発動条件に縛りがあるけど、蘇生制限も無く、尚且つハンド・アドバンテージを取れる可能性がある一枚だ」

ス「実際に使ったら『死者蘇生』と『手札抹殺』引けましたよ？」

カ「マジか!!?」

第3話 デュエルでも 必要なもの

明日香が食事を届けて数分後。

皿を空にした俺は、食堂まで持っていこうとした時にそれはやってきた。

明日香だ。

いつも思っけど、皆して暇なのな。俺にばかり構ってないで自分のこと何とかしようぜ…なんていうのを晴らすようにしてきたのは明日香の言葉だ。

『外でデュエルが行われる』と。

しかも相手はあの万条目とかいう取り巻きの大将様。ホント、皆暇だねえ…。

仕方ない。安眠妨害の代償を払わせるか…早足で皿を返した俺はそのままデュエルフィールドへ向かった。

ブルー寮・デュエルフィールド

暗がりでありあまり見えないが、青い制服の何人かと十代、メガネの小僧が向かい合っている。そこに飛び込むようにして明日香が注意するが聞いてはもらえない。ここは制裁……じゃなかった、助け舟でも出すか。

「だったら俺が誰かを相手してやるよ……さあ、誰が相手だ？」

すでにセツトしてるディスクを胸の高さまで持ち上げると、向こうは誰が出るかを話し合い始める。そして、一分もしないうちに、

「僕が行きましょう…なに、すぐに化けの皮を剥がしてやりますから」

カチン

「よく言った……」

「ちよつと！！それじゃあアナタが来た意味が……」

「悪いがそれは聞けない。手痛い竹箆返しがどれほどか、教える為のモンだ…邪魔しないでくれ」

男の子にだって意地があるんですよ、どんな時でもね。てか、いつまで余裕かましてんの？人の安眠妨害しておいてよくもまあ、そんな顔が出来るものだ。考え出したらどんどん怒りが熱を持ち始める。なのに頭がクリアなままだ。

「ほお、アナタも随分と余裕ですが、すぐにそんな顔を消してあげますよ」

「おい……」

「何ですか…？」

「そんな安い挑発に乗ると思ったか？今の俺は機嫌が頗る悪い……このままじゃ気が晴れねえ。気晴らしだ……とつとと派手な決闘ライフを始めるか」

「いいでしょう……」デュエル「決闘！！」

取り巻き LP＝4000

カイト LP＝4000

ソリッドビジョンが起動すると、虹色に輝きだす。LPが4000に固定されると、向こうのデッキからカードが五枚せり出す。俺のディスクは一呼吸置いてから自動的にシャッフルされた後、自分でカードを五枚引き抜く。

今の手札は、

・パワー・ジャイアント

・二重召喚

・紅蓮魔竜の壺

・ダーク・リゾネーター

・グローアップ・バルブ

……これ、やって良いよな？てか、出来るぞ。

「何を固まっているのですか？私のターン、ドロー……私はカードを一枚伏せて、ターンエンド」

取り巻きの後ろからは「もう来たのか……」やら「アレが見れるのか」やら聞こえるが、正直に言おう。

無駄だ。

「俺のターン、ドロー」

来たのは……『クリエイト・リゾネーター』。うん、これ決定。手札に加えると大きく深呼吸する。

「どうしました？まさか手札事故ですか？」

その言葉に大きな笑い声が聞こえてくる。よし、殺ろう。

「んな訳ねえだろ……手札のモンスターを墓地に送り、『パワー・ジャイアント』を攻撃表示で特殊召喚！」

墓地に『グローアップ・バルブ』を送って、出てきたのはビビットカラーのクリスタルで出来た巨人。

パワー・ジャイアント ATK＝2200 DEF＝0

「な……攻撃力2200のモンスターを特殊召喚だと!？」

「このカードは、手札のレベル4以下のモンスターを墓地に送ることと特殊召喚できる。そして、墓地に送ったモンスターのレベル分だけ、このカードのレベルは下がる」

「すっげ〜……いきなりレベル5のモンスターが出てきた」

「しかも攻撃力は2200……」

「レベル以外のステータスは変わらないまま特殊召喚できて、尚且つ序盤では攻撃力でボード・アドバンテージを取れる。召喚権を行使しなくても充分に制圧力があるわ」

「明日香…半分正解で半分不正解」

「え…？」

「まだ行くぞ。手札から『ダーク・リゾネーター』を通常召喚。そして、レベル5となった『パワー・ジャイアント』にレベル3の『ダーク・リゾネーター』をチューニング」

音叉から波紋が広がり、それに重なるように悪魔が三つの輪に変化する。

「『王者の鼓動、今此処に列を成す。天地鳴動の力を見るが良い』……シンクロ召喚……！！」

五つの光が一筋の光に変わったとき、炎となり、紅蓮の竜が羽ばたき、咆哮を上げる。

「我が魂、『レッド・デモンス・ドラゴン』……！！」

レッド・デモンス・ドラゴン ATK=3000 DEF=2

000

「な…… たった1ターンで攻撃力3000のモンスターを…」

「頭痛薬飲んだか？鎮静剤打ったか？まだまだこれからだ……レベル8のシンクロモンスターが特殊召喚に成功した時、手札の『クリエイト・リゾネーター』を特殊召喚。手札から魔法カード『デュアル召喚』を發動。この効果によりこのターン、もう一度だけ通常召喚が出来る」

普通はここまでしなくて良いけど、一応保険って事で。

「更に、墓地に存在する『グローアップ・バルブ』の効果發動。デッキの一番上のカードを墓地に送ることで、このカードを特殊召喚できる。蘇れ、『グローアップ・バルブ』」

グローアップ・バルブ ATK=100 DEF=100

球根から覗く目が怪しく光るとフィールドに現れる。これで全て揃った。後は俺の技量次第だ。理由は不純だけど、怒って良いことだよな？てか、すでに俺の魂は暴れまわってます。

「もう誰にも……止められないぜ。荒ぶる魂…『バーニング・ソウル』！！」

それに呼応するかのように『レッド・デーモンズ』が赤く輝きだす。操られるかのように二体の『チューナー』も赤い光を纏う。

「レベル8の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』に、レベル1の『グローアップ・バルブ』とレベル3の『クリエイト・リゾネーター』を、『ダブルチューニング』！！」

シンクロ召喚の時の緑の輪ではなく、四つの焰の輪が『レッド・デ
ーモンズ』を包み込む。

「『王者と悪魔、今此処に交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫び
を上げよ』……！シンクロ召喚……！」

光の中なら出てきたのは、紺色の焰の模様が付いた赤い竜。二対四
枚の翼が荒々しく羽ばたき、焰とともに産声を上げる。

「真紅の灼熱……『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』……！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK＝3500 DEF＝
2500

「そ、そんな……」

「レベル12のモンスター……しかも攻撃力が……」

「すっげーっ……！！俺もアイツとデュエルしたいぜ……！」

「ソリッドビジョンなのに……熱い」

やっぱレベル12のモンスターを生で見るのは皆初めてか……俺も
最初に見た時は、ビックリしたよりも正直、怖かった。映像として
映し出されるこのモンスターが今まで見たどのカードよりも『重く』
、そして『熱かった』。

「『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』の第一の効果。このカー
ドの攻撃力は、墓地に存在するチューナーモンスター1体につき5

00ポイントアップする。俺の墓地にいるチューナーは3体……よ
つて『スカーレット・ノヴァ』の攻撃力は1500ポイントアップ」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK＝3500 DEF＝
2500 ↓ ATK＝5000 DEF＝2500

「ば、馬鹿な…攻撃力、5000…」

「行くぞ……覚悟は良いな？『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』
ダイレクト・アタック
で直接攻撃！！『バーニング・ソウル』！！！」

「かかったな…伏せ（リバース）カード、オープン。『聖なるバ
リアー・ミラーフォース』発動！お前のフィールド上の攻撃表示モ
ンスター全てを破壊す」「『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』第二
の効果！このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果では
破壊されない！」な、何だと！！？」

ミラーフォースからの光すら突き破り、相手に迫る。奴は他にカー
ドを伏せなかったのが原因。さらにはLPすらも超えており、次の
ターンは実質周ってこない。

取り巻き LP＝4000 ↓ LP＝0

0と同時にブザーが鳴り、ソリッドビジョンも消えていく。消えて
いく『スカーレット・ノヴァ』に視線をやると、何だか笑ったよう
に見えた。……まさかな、主じゃない俺にそんな訳ないか。

「おい……」

「っ！！」

「今のデュエル…酷すぎた。慢心が過ぎる上に、行動一つ一つに余裕があり過ぎる。どうせ他のカードは伏せるだけ『無駄』、『不要』だとか考えてたんだろう？」

肯定なのか、全く動かない。他の取り巻きや万条目ですらも押し黙ったままだ。

「義父^{じつ}さんの言葉、そつくりそのままお前等に教えてやる……」
この世に不要なものなどない。どんな場所にも、どんな人間にも、不要なものなどあるわけないんだ」

その言葉には皆が驚いていた。哲学にも聞こえそうだが、それは学校でも社会でも、それは通用する。それだけは最初に教えておきたかったし、心に留めておいてほしかった。

「デュエルでも同じだ。どんなにレベルが低くても、どんなに攻撃力が低くても……力を合わせればどんな敵にでも立ち向かえる。だから、『不要』なものなんて、ここにもあるわけないんだ。絶対に……」

第3話 デュエルでも 必要なもの（後書き）

一応ここで第3話、終了です。

中途半端とは言わないで下さい。ちゃんと修正したり次に続くようにします。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第4話 静かな時間、突然の来訪者（前書き）

何かデュエルと対話シーンが交互になってる気が……

気にせずキーカードを、

今回は『マジシャンズ・ヴァルキリア』。

ス「自分フィールド上に存在する魔法使い族を攻撃対象に選択できない効果……永続効果にしては場持ちが悪いな」

カ「守備力が1800じゃ『アームズ・エイド』あたりまでしか止められないし……」

ス「確か数年前じゃ30000ぐらいの値段だったぞ？ちなみに絵違いの『真紅眼の黒竜』は十万ぐらいだったな」

カ「これがホントの『レアカード』、ってか？」

第4話 静かな時間、突然の来訪者

ブルー寮前・デュエルフィールド

あの憂さ晴らし（デュエル）が終わって間もない時間。未だフィールド内で対峙している取り巻きと俺。

どんなに威張っても、罵っても、『魂』が腐れば自分の全てが腐る。この言葉でどれだけ改心してくれるかなんて考えていない。ただ、デュエルって……楽しくするモンだろ？この歳でそんなグチグチと……おカタいねえ。

「俺の義父^{じふ}さんもその言葉と、仲間との『絆』でデュエルを続けた。その愚図共はお前の『仲間』か？『絆』か？それすらも履き違えてつるんでるんなら……そいつら全員と相手してやるよ……気に食わないなら……」

そついや、今何時だ？寮の前にある時計は夜の十時半を指している。そろそろか……。

「ま、いいや……こんな時間に青空教室やったって、誰も聞きやしねえからな。興が殺がれた……帰って寝る」

踵を返して部屋へ戻ろうとする俺の後を明日香が追ってくる。凜々しいお方が何で俺の『金魚のフン』になるかね。別に鬱陶しいとかそんなんじゃないけど……。

部屋に着くと、明日香が部屋に入って良いか聞いてきた。そんな疚しい気持ちなんてコレっぽっちもない上に、寝るまでの暇潰しには丁度良い。話し相手にでもなってもらうか。ベッドにディスクとデッキホルダーを放ると手近なソファに腰掛ける。足はテーブルの上に組んで。

「ソレ、行儀悪いわよ?」

「かといって、止められねえよ。こうしないと落ち着かない」

部屋なんだし別に。一番落ち着く座り方だし、三年間だけしか使わないんだ……そういう風に使っても文句無いだろ? 飲み物は…買わなきゃ無いか。

「アナタ、本当に強いよね……あんな勝ち方、誰も真似出来ないわよ?」

「強かねえよ。ただ、俺もまだまだ格^{ガキ}下さ。俺より強いヤツなんてごまんと居るだろ?」

「でも……あの召喚方法は一体何? 融合とも違うし、儀式でもない……」

「アレは『シンクロ召喚』。後は三沢あたりにでも聞いとけ……というより、説明がメンドい」

「『シンクロ召喚』……ね、言うておくけど、俺はそれをアンタに教える気も、使わせる気も無い。却って面倒事が増えるだけだ」
……面倒事って……」

そんな拒絶の言葉に明日香の表情が曇る。好奇心で使うなら怒るけど、教わるだけで使うならもつと怒る。

こういうデツキは使って何ぼ。経験値がモノを言うデツキだ……それと召喚するモンスターの『レベル予測』も大事だ。手札にチューナーだけの場合、予測の幅が広がってしまうし、チューナーが居なければ次に何を引くかだけでは足りない。戦闘等で素材が無くなったらリクルートが大変だ。後は『召喚するモンスターの効果による状況予測』。使えるシンクロモンスターは十五枚が限界。『こつち』でもそれは変えないけど。相手の戦略を的確に先読みして、その状況に合わせたモンスターを召喚する。もしくは相手の行動をストップさせ、こつちのペースに持ち込む。

「……………ま、気が変わったら教えてやるよ。それまでは頭の片隅に憶えておけ」

「わ、解ったわ……」

「そういう事だから、俺は寝る。もうちょっと寝ないとどうも頭がスツキリしない」

「ええ。邪魔してごめんなさい」

なんだか釈然としない気持ちの明日香を半ば追い出す形で部屋に静

寂が戻る。明日からこれが毎日続くのかと思っただら頭が痛くなってきた。誰か俺に『平穩』という言葉をくれ。かわりにデュエルしてやるから。

二日後の夜、どうも外が騒がしい……誰がデュエルしてんだ、と思っただら十代の叫びの後、明日香の叫び声が聞こえた。一体何事？

翌朝。

食堂に現れた明日香に昨日の夜の事を聞くと、どうやら覗き魔を捕まえたらしく、そのお咎めを賭けて十代とデュエルした、との事。そろそろ良い加減勉強してくれ。騒がしくて寝ることもままならない。静かに寝ないとスツキリしないんだよ、俺。

「いい加減、夜ぐらい静かにしろよ。寝れなくて困る」

「寝てばかりじゃなくて、ちゃんと復習したら？それでも授業についていけるアナタには必要ないかもしれないでしょうけど…」

さも当然のように言うな。一応知識だけは入ってるけど、応用力に關してはあまりにも勉強不足なんだ。復習はしてるものの、そこに關しては正直困りものだ。口をつけていた珈琲が空になると同時に明日香が話を切り出す。

「そういえば、アナタってあのデッキ以外にいくつ持ってるの？デッキホルダーが後三つぐらいあったわよね？」

「ああ、デッキは全部で四つ。全部借りモンだ」

「借りてるデッキで入学したの？誰から借りてるのよ？」

「親から一つに、師匠から一つ、知り合いから二つ……かな？どれもこれもシナジーするには難しいカードばかりだ」

特にクロウとアキさんから借りているデッキは種族と名称限定のデッキだ。混ぜこぜにしたら大変危険なデッキだらけを借りたと今更後悔。

「でも、『シンクロ召喚』には特化したデッキだ。リクルートやバーンダメージ対策……破壊耐性とか全体除去なんかも兼ねているし、逆にソレを逆手にして展開できる」

「それ聞いたら、私は勝てなそうね……相手にするのを避けるに

越したこと無いわ」

「賢明だな……俺は男女問わず手加減しない」

話に夢中で珈琲が空だったのをようやく思い出した。話しすぎたのと併せて舌打ちすると、自分の分の食器を片付ける。

「ちょ……ちょっと待ってよ!？」

早々と食器を片付ける明日香を無視して、とつとアカデミアにも行くか。『平穩』なんて言葉が何か空しく感じてきた。

教室へ向かう途中でも明日香からの質問は絶えない。あまりのウザったさにとうとう俺も我慢の限界を迎えた。肩を掴んで壁に叩きつけると、思いつきり睨んで威嚇する。

「テメエの好奇心を満たすために俺は居るんじゃない……そんなに知りたいんだったら辞書でも引いて睨めっこしてろ」

「生憎と、それとデュエルしか知らないの……後、女性には優しく接するって教わらなかった？」

「失礼。こちらも生憎とデュエルと喧嘩しかしてねえんだ。『親しき仲にも礼儀あり』って言葉、憶えとけ」

負けじと睨む明日香だが、どっかの厨二病患者みたいに萌える、なんて言葉は認識していない。ただ、こっちにも『予定』ってのがある。それを終わらせるまでは『こっち』に居なきゃいけないと考える。

ると何か気が抜けた。

ヤバイヤバイ。俺の脳内、リセットしろ。ここは学校だ、『サテライト』じゃねえんだ。

肩を離すと、おどけたように取り繕う。こんな時にポーカークフェイスが出来る自分に花丸をあげたい。

「なんてな。脅しは嫌いなんだ……悪かったな」

「いえ、私も出過ぎた事を「こお~~~~~のお~~~~~」………」
「……？」

明日香が謝ろうとした時、何かがこちらに迫ってきているのが視界の隅に映った。何か……女子とは思えない形相でこっちに来てるんですけど……。

「クソ野郎おおおおー……ッ……！！……！！」

うん。喰らった俺が言うのも何だけど……素晴らしいドロップキックをお持ちで。

綺麗に両足の裏が俺の顔面を捉えると、数メートル先まで吹っ飛ばされる。仰向けに倒れた俺は熱を持っている顔面に手を当てる。うん、鼻はドコだ？

「アンタツ！明日香さんに何してんのよ……！！？」

「ジュ、ジュンコ！？」

「大丈夫ですか？明日香さん……アイツに何されました？」

まるで過保護な親のように心配するジュンコと呼ばれた女子は凄くオロオロしてる。てか、俺そんな野獣に見えるか？

「な、何もされていないけど……大丈夫かしら、彼……」

「良いんですよ、あんな獣放つておいて」

「それはこっちの台詞だ……… ったく、投げ飛ばされるのは慣れるが、まさか吹っ飛ばされるとはな」

「何だ生きてたの？そのまま死んでれば良かったのに」

「随分と辛辣だな……… 白」
ホワイトカラー

ジュンコはそれを聞いた瞬間、スカートの裾を掴んで後ずさる。

「蹴っ飛ばすのはそっちの自由だが、スカートでやるのは感心しないな。それと、後ろの水色」
ブルーカラー

何故気付いたのか、と言わんばかりに気取られた女子が同じように後ずさる。何か、今日になって俺は玩具にされてる気が……… ま、いつか。『あの人』の玩具よりかはまだマシだ。

「脅かすために背後に回ったんなら……… デンパ消しとけよ。気付いてください、って言ってるようなモンだぜ？」

「お、おっしゃってる意味が解りませんわ？」

「……… ったく、これがホントの『踏んだり蹴ったり』、ってか？ 冗談にしちゃ笑えねえ」

すっかり吞まれてしまった三人をおいて、とつとと教室に入る。てか、こんなんやってた場所が教室の目の前ってどうよ？

その日の夜、明日香に言われた通りに復習を終え、シャワーを浴びていると何か気配を感じる。おかしい…貴重品はそれぞれ部屋中にバラバラに置いてあるのに一つの場所から動こうとしない。部屋を間違えたって感じじゃないな…脅かすのも手だけどこれで女子だったら間違いなく退学モノだ。

一通りシャワーを浴び終わって、着るものを着てからタオルで頭を拭く。前方不注意だけど、拭きながら部屋に戻ると、

「遅かったですね…」

？……………何だ？声に妙な『違和感』を覚えてそちらを見ると、見知らぬ女性がベッドに腰掛けている。腰まで伸びた金髪に歳相応に凛々しい表情…コイツ、どこかで見た記憶が……………。

「あゝ……………ドチラサマ？」

「取り敢えず座って下さい。ちょっとお話が長いので…」

「ハイハイ」

ベッドのすぐ脇にあった椅子に腰掛けると棚の上に足を乗せる。

「で……話戻すけど、アンタ誰？」

努めて碎けた感じで話すと、向こうは言いたいことを整理しているのか、少し考え込んだ後に意を決して切り出した。

自らの使命と、自らの『通り名』を……

「私は『精霊世界』からアナタに仕えるためにコチラに来ました。
アナタ方側の名前で名乗るとするなら……『マジシャンズ・ヴァル
キリア』と申します」

……びっくり。

第4話 静かな時間、突然の来訪者（後書き）

第4話、如何だったでしょうか？

シンクロ召喚主体のデッキの概念は自己流なので、ご容赦下さい。
てか、主に『シンクロン』と『ドラゴン』、『魔法使い』しか使った
たことはありません。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第5話 明かされた使命、告げられた名（前書き）

さてさて、今回は殴り書きステージ。

勝手にキャラが動き出したので、そのまま投入。

今回のキーカードは、『くず鉄のかかし』

ス「攻撃宣言時に発動して、相手の攻撃を無効化するカードだ」

カ「更に発動後は再びセットされるから1ターン中に1度だけなら無効にできる」

ス「『シールド・ウイング』2枚とこれ3枚あれば5体で攻められても無傷です」

カ「うわ…鬼畜」

ス「うっせ」

第5話 明かされた使命、告げられた名

『マジシャンズ・ヴァルキリア』

そう告げられた名前に俺は覚えがあった。まだデュエリスト駆け出しの頃、コレに泣かされた記憶があるからだ。まったく2体でも邪魔なのに3体出してくるドアホがいたからだ。俺にとってはすごくトラウマな一枚だ。確かレア過ぎて今じゃ一握りの人間しか持つてなかったはず……。

いやいや、思考を切り替えなければ。

今この子は『精霊世界』と言ったか？龍可さんから聞いてはいたけど、ホントに実在するとは……

「アナタと使命を共にせよ、との師からの命により、この世界でのサポートをさせて頂きます」

「何でまた、俺のトコに？」

「今から数ヶ月前、私達の世界に『ある者』が現れ、『精霊世界』をそのものを荒らしていったからです。『エンシエント・フェアリー』様が何とか退けたものの、今度は『現実世界』にまで悪影響を及ぼしたのです」

「それには覚えがあるし、察しがつく……それが何で俺のトコに

来るのか、に繋がるんだ」

「……『紅き竜』の導きでもあるのです」

『紅き竜』。

それについては聞いているし、実際に『見た』し、ここに『ある』。でもあれば『シグナー』……選ばれた者にしか痣が出来ないはずでは？

「確かにその通りです……ですが、アナタという『^{イレギュラー}異端者』に『紅き竜』の痣が付いたのがその証……」

証……か。今の俺の背中には『紅き竜』そのものの痣がある。それも完全な『心臓』まで描かれた……俺に発現した理由も、何故俺なのか全く解らない。

「で……その『ある者』ってのは誰なんだ？まさか『ダーク・シグナー』とでも言うのか？」

「いいえ……『精霊世界』から退く際、『エンシェント・フェアリー』様に名乗ったのです……」

……『アポリア』…と」

『アポリア』。ギリシャ語で「問題解決能力の欠如」。そんな名前を持つのは一人しかいない。というか知らない。

「やっぱ、アイツに辿り着くのか……」

「彼を知っているのですか!？」

実際には『聞いた』だけだが。義父^{とう}さんが倒し、仲間と信じていた奴に裏切られ…倒れた。そう聞いている。だが、俺はそれには疑問を抱いていた。確かに『あの頃』に現れたアポリアは倒れた。ならば、『別の時間』に存在する奴は倒されたのか?時間を遡って介入してきた奴…奴等がもし『他の時間』にまで介入していたとするならば…今アイツが現れたことには納得できる。

「成程……そこまで考えたとは、流石です」

「唯の推論だ……と言いたいが、そっちに現れたんなら推論じゃなくなる」

確かに出てきたのにはそれで納得できる。以前、義父^{とう}さんと話した事がある。さっきの通り、奴は『過去の時間』に入り込み、過去を変えたとするなら……俺が今ここにいる世界は『平行世界^{パラレルワールド}』ではないのか？

俺の推論はこうだ。

アポリアはZ・ONEと共に過去へ遡り、改変することで破滅の未来を回避しようとしていた。だが、時間を行き来出来るのなら、『平行世界^{パラレルワールド}』への移動も可能ではないか、と。ベクトルさえずらせば、奴等は別の世界に介入し、こちらと同じ時間軸の出来事を改竄する。そうすると、『平行世界』が『平行世界』ではなくなる。違う道を全く同じ車が、同時に、しかも同じ場所で事故を起こせば、それは既に『違う時間』ではなく、『全く同じ時間』、つまり世界が一つの道に繋がる。

「では、未来はアナタ方の世界と……」

「ああ……繋がるだろうな。間違いない」

「それを未然に防ぐ為に、アナタが此方の世界に来て……『紅き竜』の痣を彼等から受け継いだ、と考えれば納得できるでしょう」

「だが、俺が『異端者^{イレギュラー}』であることも納得してもらおうか」

「……？どういう意味でしょうか？」

「俺は……『シグナー』の一人、『不動 遊星』の本当の子供じゃない。血が繋がっていないんだ」

数年前、完全にやさぐれてた俺を引き取ってくれたのが発端だ。

それから一緒にD・ホイールを組み上げたり、デュエルの相手をしてくれたりと、俺と一緒に居る時間を極力作ってくれた。親にしてはホントに満点だけど…それよりもあの朴念仁さを継がなくて良かったと、本気で思ったこともあった。

「では、アナタに痣が出来た理由は……」

「実のところ、サッパリ」

手の平を上に向けてお手上げのポーズ。そうすると『ヴァルキリア』も、目に見えて落胆していた。その分ベッドが沈み込んだように思える。

「ま、俺にはやる理由があるし……俺がやりたいからやるんだ。

別にそれ以上に深い理由は無い」

「……………」

「それに…正直困ってたんだよ…」

「……何が、ですか？」

困ったように頭を掻く俺に疑問符を浮かべる。此処に来て数日の間に起きた不安、不満を簡単に表すと、

「相談とか、今後の対策とか……色々言える奴が居なかったんだよ。だから来てくれて助かる。ていうか、助かったよ…アリガトな、『ヴァルキリア』」

「い、いえ……そんな……」

言いたい事が言えたところで、話題変更。

「そういえば、ここにいる間は何て呼んだら良い？」

「えっと…好きに呼んで頂いて構いません。本来の名はありますが…その、発音に困るというか……言語自体が違う、と言いますか…」

つまり、言えるは言えるが発音自体が不可能、と。じゃあ、考えるとするか…うん、

「……………」

「……………」

期待してるような視線をこちらに向けてるけど、流石に考えられない。さっきまでの真剣な雰囲気からまるで子供のようにワクワクしてる感じに変わってる。基が基だからか？いや、アレについては審議中のはず……

「じゃあ、『ミーン』」

「『ミーン』……………」

考え付くのはそれしかなかった。俺の思考回路小っさ……………なんてことはいいけど、頬を赤らめたまま、その名を復唱する『ミーン』。

「ギリシャ語で『女性』て意味だ。あまりに安直だろ？」

「い、いえ。とても素晴らしいお名前です……ありがとうございます……」

首まで真っ赤になるんじゃないだろうか、っていうくらい赤くなってる。これでも見た目は普通の女の子だもんな………何か一気にさっきまでの表情に戻ったけどどうしたんだ？

「…誰か来るみたいです。人数は二人……いえ、三人です」

ブルー寮で、三人組で、こっちに来るつつたら……今朝のか………
…ってえ!!!!!!

「兎に角隠れてくれ」

「何故です？」

いやアナタ、さっきまでの顔はドコ行っただ？ギャップありすぎて逆に怖いわ！

「『精霊世界』から来たんなら何か出来ないのか？何かこう、人寄せ付けないとか」

「それは出来ませんが…詠唱に時間が掛かります」

「どれくらい？」

「完全詠唱で一時間ほど」

「長いわ!!」

肝心なトコでこんな漫才してる場合じゃない。コレで見つかったら一体何時間小言に付き合わされることか……考えただけでゾッとする。

考え付くのは……鍵閉めて、電気消す。今はコレが精一杯。ドアの隅に移動して、ノックをやり過ごす。

『おかしいわね……さっきまで明かりが点いてたのに………』

『ほら、だからもう寝る時間だって言っただじゃない……』

『では、また日を改めて……ということ……』

『なんつか、スッキリしないのよね』

そこでやっと、足音共に喧騒が去っていく。聞こえなくなった所で、ようやく溜息。た、助かった……。

「何故明かりまで消したのですか？」

落ち着いたところにミィア。服装がワンピースのみだからか、月明かりに照らされ、それによって出来る影が彼女のボディラインの良さが窺える。…冷静に解説してる場合じゃない。

「悪いが、今日はここまで。何かどつと疲れた」

「そうですか……お疲れ様です……どちらへ？」

俺はベッドへは向かわず、部屋の中央辺りにあるソファの上に寝転ぶ。勿論ソファの毛布はソファの下に収納済み。それを羽織ると頭の後ろに手をやり、足の組む。

「俺はこっちで良い。ミアはベッドで寝ろ」

「いいえ、そのような事せずとも「悪いがコレだけは譲れない。諦める」……解りました」

横目で見ると肩を落としてベッドへ向かう。そんなに落ち込むことか？でも、流石にいきなり同じベッドでって訳には行かないし……ま、いつか。今後の事は明日から考えよう。

今はもう……疲れた。

この時点で、俺が此処に来て四日目の夜が終わりを告げた。

第5話 明かされた使命、告げられた名（後書き）

精霊登場編でございました。

納得していない人も多々いらっしゃるかと思いますが……敢えて本音は伏せます。

感想、及びご指摘ありましたらお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3005y/>

遊戯王 trust of world

2011年11月10日03時02分発行